

# 松戸市岩瀬塚田遺跡

—国立教育会館社会教育研修所建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

平成6年8月

国立教育会館

財団法人 千葉県文化財センター

## 序

江戸川を挟んで東京都と向かい合う松戸市は、東葛地区の中核都市として発展していますが、一方で多くの遺跡が所在することでも知られています。JR松戸駅に近接する相模台と呼ばれる台地上にも同じように遺跡が分布しています。

このたび、その一角にある国立教育会館社会教育研修所施設の改築が計画されましたが、予定地内に遺跡が残っていることが確認されました。このため千葉県教育委員会では、その取扱いについて関係部局と協議を行った結果、記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は、財団法人千葉県文化財センターが実施することとなり、平成6年2月に現地調査を行いました。その結果、古墳時代の住居跡などを発見し、ここに報告する運びとなりました。

本報告書が、学術資料としてはもとより、広く一般に活用され、埋蔵文化財への関心を深める資料となれば幸いです。

また、調査に当たり御指導いただきました千葉県教育委員会を始め、関係機関の皆様にお礼申し上げます。

平成6年8月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 奥山 浩

## 目 次

I. 調査に至る経緯	2
II. 遺跡周辺の歴史的環境	2
III. 検出した遺構・遺物	5
1. 先土器時代	5
2. 繩文時代	5
3. 古墳時代以降	7
IV. まとめ	10

## 挿図・図版目次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1/25,000 松戸)
第2図 岩瀬塚田遺跡の周辺地形図 (1/2,500) と遺構配置図 (右上 1/1,000)
第3図 基本層序 (1/30)
第4図 先土器時代石器 (2/3)
第5図 繩文土器拓影図 (1/2)
第6図 001・002・003住居跡 (1/60)
第7図 001・003住居跡出土遺物 (1~6・8:1/3, 7:2/3)
図版1 岩瀬塚田遺跡周辺の航空写真 (平成5年1月21日撮影)
図版2 1. 001・002・003住居跡全景 2. 001住居跡カマド全景

## 凡 例

1. 本書は、国立教育会館により計画された社会教育研修所建設用地内に所在する岩瀬塚田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本事業は、国立教育会館社会教育研修所の改築に伴う事前調査として委託を受けた財団法人千葉県文化財センターが、千葉県教育委員会の指導のもとに実施したものである。
3. 本書に収載された岩瀬塚田遺跡は、松戸市岩瀬442に所在する。調査に使用した遺跡コードは207-014である。
4. 発掘調査は平成6年2月1日から2月16日に、整理作業は2月17日から2月28日にかけて、調査部長 高木博彦、印西調査事務所長 田坂 浩の指導のもとに分室長 太田文雄が担当した。編集は印西調査事務所職員が担当した。
5. 第1図は、国土地理院発行の2万5千分の1「松戸」を使用した。
6. 図版1に使用した航空写真是、京葉測量株式会社撮影(1993年 C15-4)である。
7. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、国立教育会館、松戸市教育委員会の諸機関、関係諸氏から多くの御指導・御助言を得た。

## I. 調査に至る経緯

平成5年末に、国立教育会館から松戸市岩瀬の社会教育研修所改築の計画に伴って、当該地区の埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会があり、県教育委員会は市教育委員会の協力を得て試掘を行い、遺跡が所在する旨回答した。

その取扱いについては関係部局で協議を重ねた結果、建物部分のみ記録保存することで協議が整い、平成6年2月から財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになった。

調査に当たっては、狭い範囲を効率的に進める必要があり、かつ既存建造物の基礎がかなりの深度に及んでいることが予想されたため、その解体工事に伴って基礎部分を撤去するよう依頼した。

撤去作業は事前に調査担当者の立会いのもとに、工事関係者の重機器や労力の提供を得て慎重に実施した。発掘作業は2月1日から開始し、豊穴住居跡を3軒検出し、2月16日にすべての現地作業を終了した。

## II. 遺跡周辺の歴史的環境

岩瀬塚田遺跡は江戸川左岸に突き出た20haにも及ぶ広大な台地上に位置し、眼下には江戸川本流によって形成された氾濫原が広がる。台地全体は周知の相模台城跡として一般に知られており、またJR松戸駅東口に近接するため、過去においても開発に伴う発掘調査が実施され、台地北端から奈良時代の豊穴住居跡を検出している(註1)。

昭和60年に行った遺跡分布調査の結果、松戸市内には170余か所の遺跡が所在することが確認された(註2)。その内訳は、遺物散布地84か所、貝塚57か所、古墳12基、城館跡10か所などである。これらの遺跡の多くは、江戸川や、その支流によって複雑に開析された、江戸川を西に望む舌状台地上や支流域の谷頭などに占地している。

ここでは、本遺跡に隣接する周辺遺跡の分布状況から、その歴史的環境について概要を述べてみたい。

松戸市における縄文時代の遺跡は貝の花・大谷口・幸田など、大規模な貝塚が数多く調査され、その成果はすでに報告され、広く一般に知られているところである(註3)。また近接する下水・通源寺など前期から後期にかけての遺跡が研究者によって紹介されている(註4)。

古墳時代では、遺跡北方の小支谷を挟んだ隣接の台地上に、鐵刀が出土した竹ヶ花古墳があり(註5)、近接する市役所付近からは古墳時代後期の土器も発見されている。また東方約1.2kmには天神山古墳が、さらに3km隔てて河原塚古墳群がある。この古墳群は円墳4基で構成されているが、昭和30年に一部調査され、粘土床の埋葬施設からガラス小玉や鐵剣など多彩な副葬品が出土し、その後の古墳研究に多大な影響を与えた(註6)。本遺跡の所在する相模台上にも、かつて古墳があったと「松戸市史」(註7)に記載されているが、こうした周辺の環境からみても、

古墳群が存在していた可能性がかなり高いといえよう。

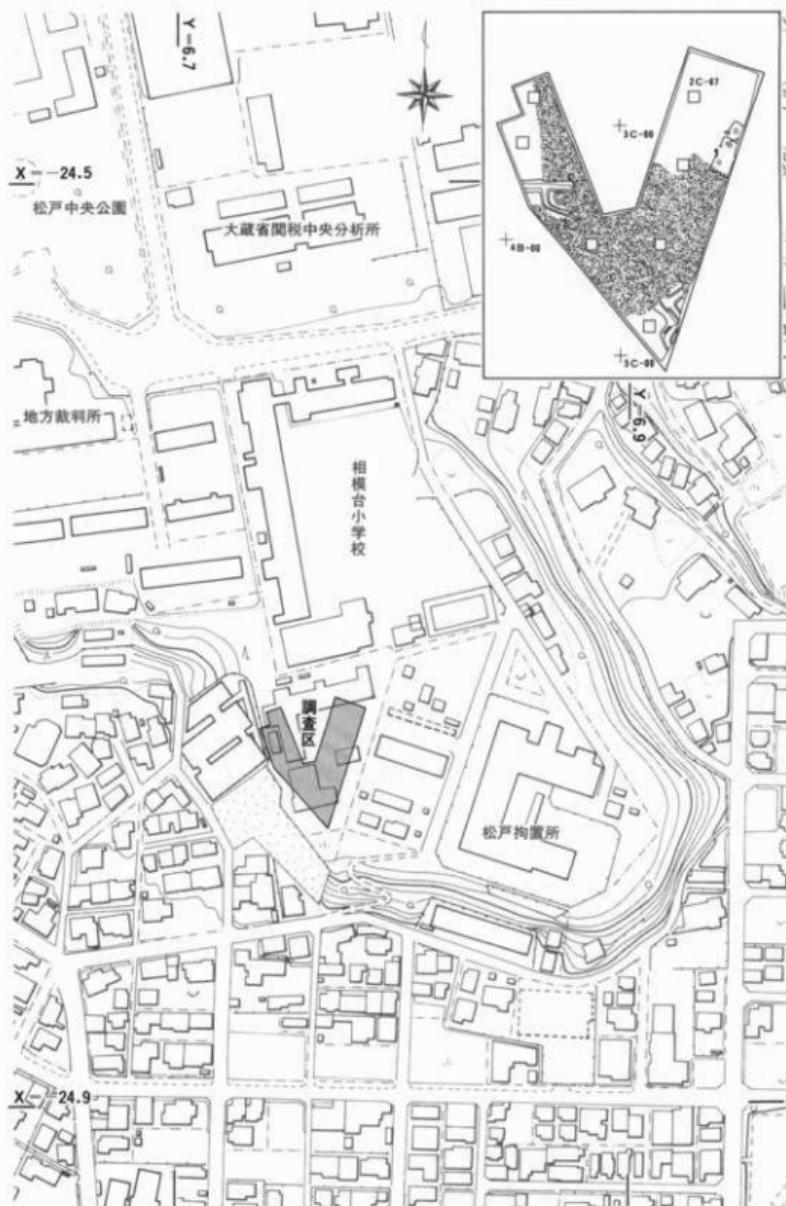
奈良時代になると松戸市内では集落などの痕跡がほとんど認められず、紙敷坂花から「國厨」と墨書きされた骨蔵器が発見された例などがあるにすぎない(註8)。ただし、南方に1.5kmほどの市川市北国分地区には、八反割B遺跡(註9)など十指に余る遺跡が知られている。

#### 註

1. 千葉県教育庁文化課 「千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報—昭和53年度—」 1980
2. (財)千葉県文化財センター 「千葉県埋蔵文化財分布地図 (1)—東葛飾・印旛地区—」 1985
3. 松戸市教育委員会 「貝の花貝塚」 1973他
4. 湯浅喜代治 「松戸の遺跡 11 下州池遺跡」「かみしき」12 下總史料館 1973  
塙田 光他 「千葉県通源寺貝塚採集の中期縄文土器」「考古学雑誌」59-1 日本考古学会 1974
5. 岩崎卓也 「竹ヶ花古墳」「松戸市文化財調査報告」1 松戸市教育委員会 1963
6. 小出義治他 「松戸市河原塚古墳」 松戸市史編纂委員会 1959
7. 松戸市 「松戸市史」上巻 1961
8. 岩崎卓也・松下邦夫 「國厨銘ある火葬骨壺について」「史潮」78 歴史学会 1961
9. 市川市教育委員会 「八反割B遺跡」「市川市埋蔵文化財発掘調査報告」 1980



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1/25,000 松戸)



第2図 岩瀬塚田遺跡の周辺地形図 (1/2,500) と遺構配置図 (右上 1/1,000)

### III. 検出した遺構・遺物

#### 1. 先土器時代

先土器時代の調査は  $2 \times 2$  m の確認グリッドを 7 か所設定して（第 2 図右上）実施したが、遺構・遺物とも検出されなかった。

基本層序として 2C-67 グリッド東壁面でとらえた土層を提示する（第 3 図）。

III 層：ソフトローム層。クラックが発達し、最深部は

第 2 黒色帯にまで及ぶ。

IV 層：褐色を呈し、やや軟質となる。

V 層：第 1 黒色帯。

VI 層：AT バミスが混在する層。

VII 層：第 2 黒色帯上部。AT バミスが若干混在する。

IX a 層：VII 層よりも暗色を呈し、赤色・黒色スコリアが含まれる。

IX c 層：もっとも暗色を呈する層で、赤色・黒色スコリアが多く含まれる。

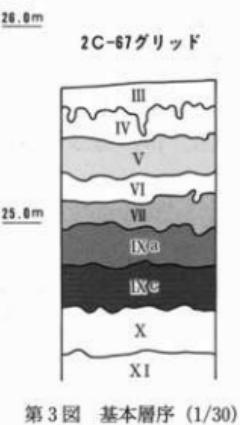
X 層：褐色を呈し、堅致ではあるが上部層よりもやや軟質となる。

XI 層：武藏野ローム層。灰褐色を呈する、やや粘質な土層。表採品として石器 1 点を採集している（第 4 図）。黒曜石製の槍先形尖頭器で、基部のみ残存する。計測値は長さ 2.32cm、幅 2.01cm、厚さ 0.59cm、重量 2.30g を測る。調整部位は表面全体に微細な調整が施されるが、裏面は素材剝片の主要剝離面を残す。欠損しているため定かではないが、先端部についても同様に、主要剝離面には調整が施されていないものと思われる。

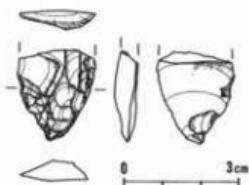
#### 2. 繩文時代

検出した遺構はなく、少量の土器を採集したにとどまる（第 5 図）。

内容的には、縄文時代前期、中期と後期の土器片が確認されている。これらは、後世の攢乱等の影響を少なからず受けている。遺跡の立地は、比較的良好な環境の台地上であるので、今後同一の台地上で比較的条件に恵まれた地点が調査されるならば、さらに縄文時代の遺構・遺物が検出される可能性があることを加えておきたい。なお、今回の調査で出土した縄文土器は、図示したものがほとんどすべてで、特に分類等は行わず、一応の時代順を追って説明す



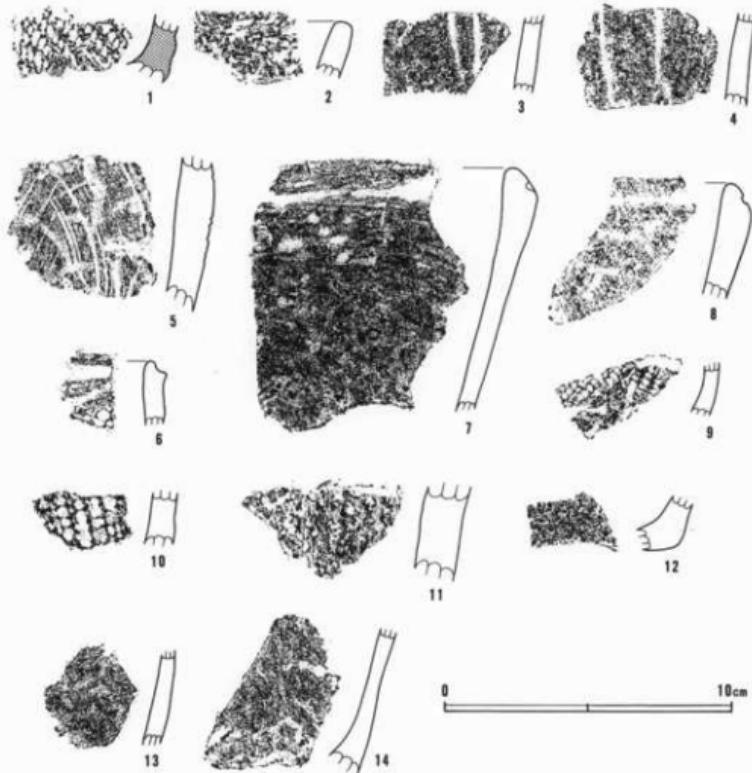
第 3 図 基本層序 (1/30)



第 4 図 先土器時代石器 (2/3)

ることにする。

1は胎土中に纖維を含むもので、底部付近の破片である。縄文は単節R Lが施されている。縄文時代前期前半の黒浜式土器である。2は、口唇部が比較的平坦な形状を呈す口縁部片である。文様は認められないが、胎土中には石英粒等の小礫が含まれており、諸磯式等の縄文時代前期後半の土器と思われる。3、4は、いずれも橙褐色を呈する比較的薄手の土器である。文様は、垂下する浅い平行沈線により表出される。おそらく、縄文時代中期の加曾利E II式に比定できるものであろう。5は、櫛歯状工具により曲線状の文様が表出されるものである。縄文時代後期初頭の称名寺式と思われる。6～8は、口唇下に横位の沈線が巡る口縁部片である。これらは、やはり縄文時代後期前半の堀之内式土器である。9は、内湾する器形の胴部片である。単節L R縄文を横位の沈線により区画し、磨消縄文の手法が採られている。後期中葉の加曾利B式土器である。10、11は、縄文のみが認められる胴部片である。11については、器面に



第5図 縄文土器拓影図 (1/2)

施文された縄文の様子から、後期に属する土器の可能性が考えられるが、断定はできない。12は、無文の底部付近の破片である。色調及び胎土の状況は、3、4に類似している。13、14は同一個体と思われる。14は底部付近の破片で、縦位にミガキ状の器面調整の痕跡が認められることから、縄文時代後期の土器片であろうと思われる。

### 3. 古墳時代以降

調査区の北東側で、重複した3軒の住居跡を検出した(第6図)。いずれも擾乱を受けているため、その全体を知ることはできない。また、遺物の帰属についても判断に苦しむところがあるため住居の年代決定は曖昧にならざるを得ない。

001住居跡の規模・形態は一辺6m弱の方形をなすものと推定できる。主軸はN-63°-Wである。壁溝はカマド部も含めて全周していたものであろう。カマドは西壁中央に設けられ、カマド両袖脇に径20cm程のピットが伴っている(P3・4)。主柱穴は2本遺存しているが(P1・2), いずれも柱痕跡をとどめていないことから、抜き取られたものと判断できる。

002住居跡も西壁にカマドを持つ住居で北西隅だけが遺存している。このため住居の規模・形態とともに不明である。主軸はN-53°-Wをとる。壁溝はカマド部をのぞいて巡らされている。北西の主柱穴(P6)と壁溝に取り付く間仕切り溝がある。

003住居跡は北西隅のごく一部を検出したもので、3軒の住居跡の中で最も新しい時期の所産である。規模・形態ともに不明である。壁溝は存在しない。

以上の3軒の新旧関係は002が最も古く、次に001、最も新しいのが003となっている。

この3軒の住居跡から出土した遺物は図示したもの(第7図)以外に、土師器壺95片、土師器坏6片、土師器高坏3片、須恵器壺1片を数える。ほとんどが古墳時代後期の所産と考えられるものである。

1は須恵器無高台坏身の口縁部破片で、復元口径13.5cmとなる。胎土は緻密で、しっとりとした器面となっている。東海地方の製品であろう。

2・3は土師器高坏の坏部で、比較的偏平な坏部となっている。体部外面はヘラケズリが施される。脚部の形態は不明である。復元口径は前者が16.8cm、後者が18.0cmである。

4は復元口径22.6cmとなる土師器鉢で、体部外面にはヘラケズリを施す。

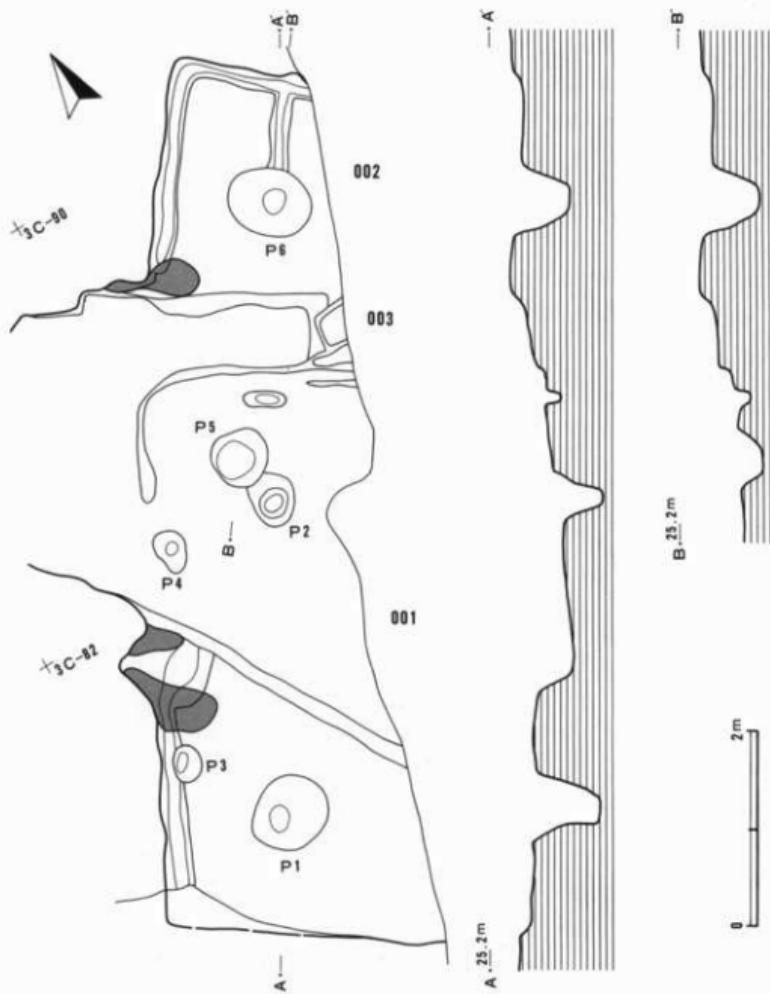
5は須恵器蓋で復元口径14cmである。口縁端部はしっかりととした作りとなっている。天井部外面は焼成時における灰被りが認められる。胎土は緻密であるが、器面は1に比してややざらつきがある。湖西地域の8世紀代の製品であろう。

6は「く」の字を呈した口縁部の土師器壺である。復元口径は23.4cm。頸部直下は横から斜め上方へのヘラケズリ、それより下部は上から下へのヘラケズリを施す。

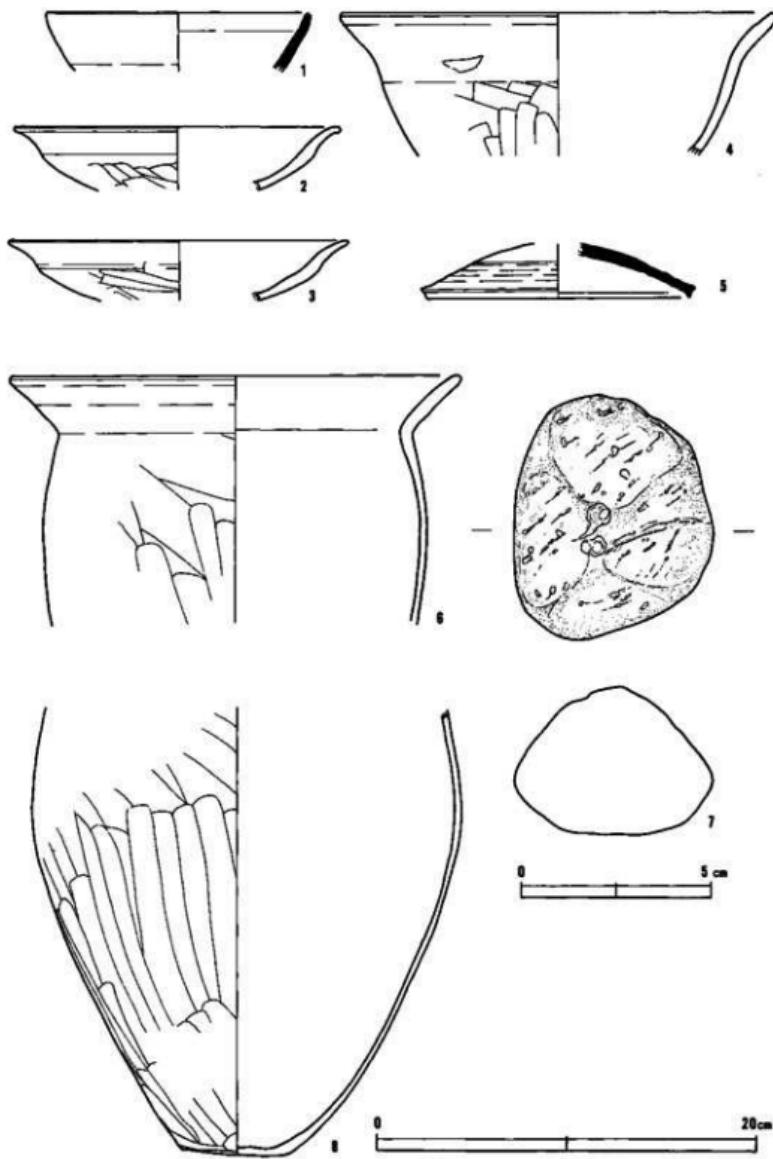
7は重量38.8gの輕石で、表面は擦られており、自然面はほとんど残っていない。

以上の遺物は001住居の覆土から出土したもので、6の須恵器蓋をのぞいてすべて古墳時代後期の所産である。

8は003住居跡の床面から出土した土師器甕で口頸部を欠失している。胸部の器厚は薄い作りで、縦方向のヘラケズリが施される。底径は5.6cmである。



第6図 001・002・003住居跡 (1/60)



第7図 001-003住居跡出土遺物 (1~6・8:1/3, 7:2/3)

## IV. まとめ

重複して検出された3軒の竪穴住居跡は、ともに古墳時代後期後半から終末期にかかる時期に比定できる。つまりは各々の居住期間は、きわめて短かったことが想定される。今回の調査では後世の攢乱が甚しく、かつ狭い範囲であったため、集落としての変遷は推定のしようもないが、遺跡の所在する台地の広さなどから、この時期を中心とするかなりの規模の集落が存在する可能性は否定できない。

本遺跡の所在する台地は相模台城として知られているが、その繩張など城の構造に関する史料はほとんどない。今回の調査では構造を解明できる遺構の検出を予測しながら作業を進めた。調査区の南側からは堀状の遺構が、西からは溝が検出されたが(第2図右上)、覆土の状況などから陸軍工兵学校当時のものと判明し、残念ながら城の手掛かりとなるものは認められなかつた。

最後に相模台城について若干触れておくと、『本土寺過去帳』によると、天文7年(1538年)国府台の合戦の折、相模台においても戦闘が行われ、数千の死者が出たことを伝えている。しかし、その位置と規模については、有力な文献もなく不確かな部分が多いと言わざるを得ない。

そのような中で『千葉県東葛飾郡誌』では、相模台の北東側の低地に殿井戸と屋敷跡と考えられる土塁の存在を指摘し、周囲1里弱の城域をもっていたものと推測している(註1)。『日本城郭大系』は、遠瀬戸を大手とし、その付近に大殿井と称する井戸の存在を示し、また松戸拘置所と相模台小学校付近に土塁が、検察院付近には空堀があったとしている(註2)。したがって、台地全体を城域に当てているようである。

また、平岡 豊氏は台地南西部の相模台公園から検察院付近が有力であるとし、旧水戸街道を見おろすこと、台地西部から通じる道路が地域を区画していることを指摘している(註3)。

現状では、視覚的に捉える遺構が皆無であり、今回の調査区内においても地下に遺構が存在しなかつたが、比較的原状をとどめていると思われる西側の斜面付近に堀等の遺存する可能性に期待したい。

さらには、中世城館の持つ生活、防衛機能を総体的に捉えようとするなら、本台地の南北に位置する松渡城や根本城との関係についても併せて検討する必要があろう。

### 註

1. 東葛飾郡教育会『千葉県東葛飾郡誌』1923
2. 松下邦夫「相模台城」「日本城郭大系」第6巻 1980
3. 平岡 豊「松戸市の中世城館址(1)」「戸定論叢」第1号 松戸市教育委員会 1990



岩瀬塚田遺跡周辺の航空写真（平成5年1月21日撮影）



1. 001・002・003住居跡全景



2. 001住居跡カマド全景

# 報告書抄録

ふりがな	まつどし いわせつかだ いせき							
書名	松戸市岩瀬原田遺跡							
調査名	国立教育会館社会教育研修所建設に伴う埋蔵文化財調査							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第260集							
編著者名	谷句							
編集機関	財団法人千葉県文化財センター							
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2 Tel 043-422-8811							
発行年月日	西暦 1994年8月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯 ° ° °	東 緯 ° ° °	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
岩瀬原田	千葉県松戸市岩瀬	市町村	遺跡番号	35度 46分 36秒	139度 54分 30秒	19940201～ 19940216	700	国立教育会館社会教育研修所松戸新宮工事に伴う事前調査
所取遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
岩瀬原田	集落跡	先土器時代		他先形尖頭器			松戸市では数少ない古墳時代後期の集落遺跡である。	
		縄文時代	前期	馬頭式土器 加曾利E式土器 称名寺式・堀之内式土器 加曾利B式土器				
			中期					
			後期				古墳時代	後期

千葉県文化財センター調査報告第260集

## 松戸市岩瀬塚田遺跡

—国立教育会館社会教育研修所建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

---

印刷 平成6年8月25日

発行 平成6年8月31日

発行 国立教育会館

千代田区霞が関3-2-3 (03)3580-1251

編集 財団法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809-2 (043)422-8811

---

印刷 株式会社エリート印刷